

## 〔共済連だより〕

# 家畜診療日誌

南部家畜診療所 大屋 卓志

最近流行している病気と言えば、やはり新型インフルエンザであろう。これは主に豚がかかるインフルエンザウイルスが変異し、人から人へとうつる新型インフルエンザ(H1N1型)となり現在世界中で感染が拡大しています。この新型インフルエンザウイルスは弱毒性で呼吸器を中心に感染し季節のインフルエンザと同様の症状を示すとされています。しかしこのインフルエンザウイルスは、感染を繰り返す間に変異を起こし、致死率が上がる可能性もあり、また強毒性(全身感染)の鳥インフルエンザ(H5N1型)と交雑し、さらに新しい型のウイルスとなり人間の『新型インフルエンザ』となれば世界的大混乱がおきると懸念されています。現在世界中でウイルスの封じ込みと感染防止を行っているためまだ人型ウイルスには変化していない状況です。

ところで昨年は牛において異常産が多発した年でありました。これにより妊娠牛の流産が散発し、我々臨床獣医師も奇形胎児分娩に伴う難産で忙しく、胎児の死亡率も増加し酪農経営に多大な損失をもたらしたのではないかと思います。

異常産はヌカカなどが牛を吸血するときにウイルスが牛の体内に入り感染が起こります。

妊娠牛では血液中のウイルスが胎盤を通過して胎児に感染し胎児の体内で増殖し胎児を死亡させたり後遺症を残します。これにより流死産や奇形などの異常産が発生します。異常産を起こす疾病にはアカバネ病、アイノウイルス病、チュウザン病等がありウイルスの伝播は吸血昆虫の媒介によるため広範囲に及び、全国的またはいくつかの地方で同時期に発生します。発生地は媒介昆虫の生息、活動と一致し、これらの昆虫は気温が高くなったときに活動するので感染は夏から秋にかけて起こり、発生にも季節性がみられます。岡山県では平成10年、平成15年、平成20年と5年ごとに大発生しているよ

うです。これらの異常産ウイルスは新型インフルエンザとは違い、既にワクチンが開発され流行期前の3月～5月末頃にワクチン接種することにより予防できます。しかしながら当診療所管内の異常産ワクチンの接種率は繁殖和牛はほぼ100%ですが乳牛接種率が低い状況です。異常産ウイルスが流行した場合、異常産発生率は10%を超え、異常産に基づく乳量の減少量の平均は産乳量の30%と報告があります。30頭飼養農家で発生した場合の損出額は688,500円となりこれに胎児の死亡損失を加算すると70万円を超えると考えられます。また牛異常産ワクチンの効果的かつ経済的ワクチンプログラムが研究されており、3種混合ワクチンを初年度2回接種、翌年1回接種、以降隔年接種することで予防効果が期待できる。これを実施した場合の経費は51,000円となり、ワクチン代にかかる経費より異常産が発生した時の経済損失の方がはるかに大きく、ワクチン接種の実施が不可欠であると考えます。管内の酪農家に啓蒙し異常産ワクチンの接種を広めていく必要があると考えます。